

BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

32

第三六回受賞作品（一九九五年）

彩の国さいたま芸術劇場

後編

前編はさいたま芸術劇場が生まれた時代背景と、魅力ある劇場空間が設計された経緯を振り返った。後編は多様な空間構成の劇場建築を実現した施工者の努力と海外からも高く評価されてきた芸術劇場の活動、地域との連携を目指す今後について紹介する。

多様に展開する建物に 取り組む

「さいたま芸術劇場」の施工は、間組（現・安藤ハザマ）、大成建設、八生建設の三社JVによって行われた。所長を務めた川口忠明氏が着工前から感じたのは関係者の強い熱意だった。「県の担当者の方からは文化芸術の拠点として計画された埼玉県の最重要プロジェクトなので、工期は二七カ月と厳しいけれども、近隣に配慮して、高品質の建物を完成させてほしいと要望されました。そのため協力者は惜しみませんと言われ、香山先生からも『一緒になって取り組み

ましよう』と声を掛けていただき、感じるものがありました」。

芸術劇場の建物形状の特徴は、四つの独立したホールと稽古場・練習場、資料室や情報プラザなどさまざまな用途の空間が集合し、「ロトンダ」「ギャラリー」という造形的な空間によって一体に結ばれていることだ。一階、二階の複雑に展開する空間をつくりあげることに必要で、JVはそれに伴う多くの工程を工夫し、注意深く施工を進め、設計変更にも対応した。

高品質の打ち放し 仕上げを目指し コンクリートを独自調査に

「平面的に入り組んでいるので、躯体工事は八工区、一九セクションの分割工区としました。敷地が広く、ホールごとにゾーンが分かれ、それを同時並行で施工するために、最盛期は五〇〇人が現場に入っていました」と川口氏。人員の確保にも苦労したという。

多岐にわたる工事の中で、とくにこだわったのは、コンクリート打放し仕上げの品質だった。「空

直径32mの円筒状の広場「ロトンダ」が劇場の中心を形づくる。2階レベルで、三方に大ホール、音楽ホール、小ホールのエントランスが設けられ、向き合っている。中央のガラスの光庭が、ロトンダと1階の情報プラザをつないでいる。



アプローチの大階段を昇りきってロトンダへ。右手にはくつろげるベンチも設けられ、地域の憩いの場になっている。散歩する人たち、遊び場所にする子供たちもいる。この1階には映像ホールが設けられている。

くも設置され、それを上下させる多数のモーター、カウンターウェイトなどを装備している。照明ブリッジも加わる。設置は高所に工事足場を組み上げ、それらの資材を搬入し、取り付けながら、足場

の高さを落としていったという。普段は観客の目に触れないところにも、大掛かりな工事が行われていたのだった。

「苦しいこともありましたが、優秀なスタッフと、意識の高い職人が揃っていたおかげで、よい結果が残せたと思っています」。オープンしてから川口氏は、家族と一緒に観客として、芸術劇場を楽しんでいる。

市民が気軽に親しむ 創造する劇場へ

「彩の国さいたま芸術劇場」は演劇、舞踏、音楽などの舞台芸術作品をつくり、主催・上演している公共劇場である。管理・運営を公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団が行っており、創作の責任者として芸術監督を置き、制作プロデューサーと、技術面では音響、照明、舞台などの専門技術者を運営組織の中にもっている。「全国で約二、〇〇〇の公立文化施設があります。ここから体制をもつ劇場は二〇ほど。ここから舞台芸術の文化を発信するのが大きな役

割です」と木全義男館長。県の担当部署から財団へ移って長年芸術劇場に関わり、二〇一四年に五代目の館長に就任した。技術運営と施設管理を行う劇場部長・山海隆弘氏も「このような運営が、二〇年でようやく認知されてきました」と振り返る。

初代の理事長・館長、芸術監督は現代音楽の作曲家・諸井誠氏が一〇年間務めた。世界のトップレベルの劇場を目指し、舞踏、音楽、演劇など、その分野の世界的に評価の高いアーティストを招いて、多くの公演が行われた。たとえば、「コンテンポラリー・ダンス」では世界で超一流のダンス・カンパニーを招き、斬新なラインナップを展開して、劇場の特色をつくった。

情報は日本と世界に向けて発信され、さいたま芸術劇場は海外で評価される。その後、地元美術館や大学と連携する取組みも構想された。次のステップとして、シェイクスピアの全作品を演出・上演する企画を劇場の主軸に据えて、二〇〇六年に演出家・蜷川幸雄氏が芸術監督に就任し、人気を呼ん

だ。また、蜷川氏は地元の人たちと積極的に交流し、親しみやすく開かれた劇場へと進化させてきた。五五歳以上のシニアが演者となる「さいたまゴールド・シアター」、若手俳優育成プロジェクト「さいたまネクスト・シアター」を創設し、演劇を市民の身近に引き寄せる役割も果たしている。

二〇一一年には舞台機構や設備のバージョンアップを中心に、改修工事が行われた。「竣工の一〇年後、香山先生に立てていただいた五〇年間の改修計画があり、それに沿って、メンテナンスを行っています。但し、県の予算の制約もあり、積み残しも出てきます」と山海劇場部長。早め早めに手を打てるようにしたいという。

市民の一人ひとりが身近にある劇場で、楽しく、臨場感にあふれる舞台芸術を味わうことができる。と気づくところから、文化は根付いていくのかもしれない。BCS賞を受賞した三者の連携のバトンは、この劇場と地域に引き継がれ、文化芸術の拠点としてさらなる発展をみせてくれることだろう。